



キャビネットとユニットのフレームはどちらもアルミ製で25mmほど前に突き出ている



120-CX

1950年代後期に開発された30cmコアキシャル・ユニット。赤い布製のエッジは半永久的なタイプでとても目を惹く。5,000Hz以上を受け持つ5KTツイーターはJBL-075の原型のようなタイプで、抜けの良い特性の高域音がフルレンジ的な鳴りのウーハーに良くマッチ。クリアな音質で、どんなジャンルの音楽にもおーりマイティに対応できる



E-2の正面写真

スピーカーキャビネットの正面の枠とユニットのフレーム、そして脚の部分がアルミ製となっている。真正面からは木目の部分が全く見えないデザイン。少し斜めから眺めると天板や側面に美しい木目が見える。正面は円と四角のみのデザインだが、黄金比ともいえるバランスのいい比率がとても目を惹く。当時の音楽鑑賞はまだモノラル時代だったので、左側に円、右側に四角の1タイプしか製造されていなかった。

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。今回は米国Stephens社が1950年代に手掛けたトゥルースニック／イームズラインのスピーカーを紹介する。

本文 / 田中伊佐資

製品解説 / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表)

撮影 / 小林幹彦(彩虹舎)

第41回 Stephens / Tru-sonic

Stephens社はアメリカで1940年代からスピーカーメーカーとしてよく知られていた。そして、同国でオーディオブームが最盛期を迎える1950年代の中頃、当時既にアメリカでインテリアデザイナーとして名前が知られていたチャールズ・イームズにスピーカーのキャビネットデザインを依頼。1957年頃にイームズが世界で初めてデザインしたスピーカーシステムとしてTru-sonic / Eamesラインの4タイプのスピーカーを発表した。当時としてはめずらしく外装にアルミと木材を匠にマッチさせたモダンなスタイルとなっていて、現在でも古さを感じさせない完成度の高いデザイン。そのなかの数点は著名な博物館に所蔵されている。



E-2

E-1とE-2のキャビネットサイズは同じだが、ユニット構成が異なる。今回紹介するE-2は30cm 2ウェイのコアキシャル・ユニットを搭載したタイプ。初期タイプは122AX、後期タイプは120CXを採用している。キャビネットの構造はショートバックロードホーンになっており、材質は米マツ合板を使用。脚部の形状の違いで2種類がありE-2Sはハーマンミラー製と思われるX脚が装着されており、E-2Lはアルミ製の4本脚となっている。

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

Leak / LEAK Point one Pre-amp



Shown here, the first of the Charles Eames designs for Stephens Tru-sonic speaker enclosures. Essentially, they are a combination of Eames' design talent and Stephens' pioneer audio engineering. Mr. Eames has already designed the most important group of furniture ever developed in this country. His achievements in this and other fields indicate both technical inventiveness and aesthetic brilliance. There are more Eames designed enclosures to come... fresh, exciting concepts in form and audio structure.

STEPHENS TRU-SONIC INC
8538 Warner Drive, Culver City, California



今回の試聴に使ったアトリエ Je-tee オリジナルシステム「Je-tee ミッドセンチュリー style speaker system」。キャビネットデザインはチャールズ・イームズやジョージ・ネルソンのスタイルをアレンジして、構造や素材もオリジナルを元に設計。小型のブックシェルフ型とフロア型でそれぞれカラーリングも2種類ある。搭載されているユニットも当時のビンテージスピーカーにこだわり、小型のブックシェルフ型は60年代中頃に生産されたUTAH社の30cm コアキシャルユニット。フロア型はサイズも構造もE-2と同じでTru-sonic 120 CX が搭載され、専用のアルミのX脚スタンドがオプションで装備可能となっている。サイズはブックシェルフ型が600W×40H×300Dmm、フロア型は760W×55H×340Dmmとなっている

1957年頃の Tru-sonic オリジナルのカタログ。大きく赤で「E」の文字をあしらったデザインのページ下の方に誇らしげに THE FIRST CHARLES EAMES DESIGN FOR STEPHENS と表記がある。上がX脚タイプのE-2Sで下が4本足タイプのE-2Lとなる。正面のカラーリングにはブルーとブラックのほか、木目仕上げも数種類あった

「今日はトゥルースニックですよ」とアトリエJe-teeへ行く道すがら編集者から告げられて、連載の初期に同軸ユニットを取材したことを思い出した。「あれはもう一度聴いてみたかった」などとあれこれ話をしているうちに店へ到着。試聴室に入ったとたん「というかイームズじゃないですか」と僕はうれしくなつて岡田さんに声をかけた。

かつて目の前にあるタイプよりワンサイズ大きいものが店に置いてあった。その格好いい姿は今でも記憶に残っている。そのとき岡田さんは何も知らなかった僕に「アメリカのミッドセンチュリー期を代表する家具のブランドなんです」と教えてくれて、なるほどと納得した。

デザイナーのチャールズ&レイ・イームズ夫妻が手掛けた作品は多岐に及ぶらしい。インダストリアル・デザイン界に与えた影響は多大だ。作品群のなかにスピーカーがあったのは実に喜ばしい。今回登場するのはE-2というモデルだ。E-1からE-4までサイズや仕様異なるバリエーションがあるそうで、以前、僕が見たのはE-3だった。

「四角と丸の比率が抜群にいいデザインだよ」と言われ、確かにあと1cmでもどこかが長かったり短かったりすると、このデザインは崩壊するだろう。

そしてイームズがさすがなのは、あくまでもスタイル重視で音質はお茶を濁す

「この洗練された音とデザイン共有されなければ罪である」

「みたいな感覚で作っていなかったことだ。オーディオメーカーに負けない音を目指していた。」

「やつと冒頭の話につながるが、使用しているユニットがトゥルースニックの30cm同軸なのである。」

まずはビル・エヴァンスの「酒とバラの日々」、コルトレインのバラード「セイイット」がかかった。

明るくてかなりヌケがいい。気負いがなく気持ちのいい音。奥深いヴィンテージ・サウンドではあるけれど、見た目に引く張られるのかもしれないがレトロ感には希薄で見事に洗練されている。「名は体を表す」としてもそれほど強引ではないだろう。イームズ家具に通じるモダンなセンスがにじみ出ている。

新しい録音で定番のダイアナ・クラールの「ルック・オブ・ラヴ」を聴く。声の定位、フォカスの絞りがいい。さすがは同軸ユニットだ。バックの演奏もよくほぐれていて、まだるっこいところがない。

このスピーカーはどう考えてもオーディオルームでパーソナルに使うのではなく、来客をもてなすための部屋に置くべきだろう。この美しさを一人でも多くの人と共有しなければ罪だ。

当時のオリジナル品は減多に市場へ出てこないそうだ。Je-teeはこの春レプリカの製造・販売を開始するらしい。